

---

# 去った日常

羅針

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

去つた日常

### 【著者名】

ZZマーク

Z8596Z

### 【作者名】

羅針

### 【あらすじ】

現実逃避を願つても、やっぱり日常が好きな青年と、日常を願つているのに、非現実に巻き込まれる少女のお話

「う~さみい」

今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持つてない暦17年。  
名前を古見在じみざいといつ。古見 存。  
基本、コミゾンと呼ばれている。

眼は黒、少し赤みがかっている。髪は白。銀髪のほうがあつてい  
る表現だ。

銀髪はロングヘアで肩よりちょっとと長いくらい。たまに女子と聞  
違えられるほどどの容姿。

容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放つておくわけはないのだが、モテ  
ない。

クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買  
に行くとなると億劫になる。

そう、クリスマスツリーのまわりにはカツプルビもがうじゅうじゅ  
いやがるのだ。

（ひつそりとしているよー）

心の底で大声を放ち、空を見る  
空を雲が覆っていた。

（一雨きそつだな…… それまでにご飯買つておこう……）

ハロ ズまで走る。

「ん~」

背伸びをした。ハーブの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立  
ち上がり背伸び。

カツサンド3パック、ハムマヨサンド6つ、200g程度の弁当3  
0個。

「足りねえな……」

胃袋をどこに持つて行ったのだろう。

この世界には特殊な力を持つた人物が、10人いる。

一人は、電撃

一人は、火炎

といった風に、要は超能力<sup>サイ</sup>だ。P.S.I.<sup>サイ</sup>を使えるだけで、威張れるのだ。

コミゾンにはこれといったP.S.I.は無い。

P.S.I.は、

「99%の才能と1%の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。

コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。「何かいいこと起きねえかな……」

夜空を見上げる。いやな予感がする。

ポツポツと雨が降り始めた。

（やつぱりかあ）

帰ろ、と言つて地面を見たその時、

「危ない」

「は？」

上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。

「うわわわわ」

お姫様抱っこで救出

「邪魔」

ヒヨイッと腕から逃れると、その少女は空を見上げた

「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」

「は？」

キュルルルルと回転する矢がコミゾン田掛けて発射された。

キュイイイン！

その矢は兆弾され、打つた男へ戻っていく

「邪魔をするな」

「一般人を巻き込むな」

バチバチと火花を散らす一人。男は未だに宙に浮いている。  
サイキツカーカ？

少女は手を前にやると「ブレイク衝撃」と言った。

次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。

コニゾンは腰が抜けた立たなかつたが、何とか逃げた。

起きた。朝になつたので起きる。

「なんだつたんだ昨日は？」

独り言をブツブツつぶやいている「ハリビン」。

「……うにゅ」

「……」

（何も見てない聞いてない。）

地面では昨日であった少女が寝転んで熟睡していた。

「さー朝御飯食つて学校行こいづー」

「……私も」

「……」

場が沈黙する。

「返事は？」

「……」

「返事は？」

「いや……その……」

「返事は？つて聞いてんの」

「はい。スミマセン」

「よろしく」

「……」

「……いつ……中一くらいか？」

「何歳？」

「19」

「……嘘だろ？」

バツ！つと食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。

「馬鹿にしたな？」

「スミマセン…」

「よろしく」

「……」

「ふーん ふーん」

出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女

「なんでここに来たの?」

「年上だったとは…」

「行くアテがないから」

「……」

（こんな爆弾娘、いらっしゃー……）

「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく

「あつそ……」

いつのまにか冷蔵庫の前に立つて端から口に詰め込んでくる少女。

「名前は?」

「Qアリーヌ」

「……は?」

「あんたには関係ないわよ。固有記号ナナだからそいつ辱んでくれて構わない

「あんたは?」

「古見 存」

「マリゾン? 本名? それ

「本名だよ」

「そつ」

「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にじつにかいよ

「は? あんたは私とこれからトーナメント?」

「……は?」

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻するー！」

「何で、俺に、そこまで、固執するんだ？」

「始めて一緒に寝た人だから（ボツ）」

「誤解を招く発言は止めろ」

「いいじゃ 25田にもなつて学校なんでおかしいよお」

「たぬき

頭いいのに？」

— テストはまとめて……?

「貴方のことなら何でも

—俺の名前知らなかつたよな

「あの豊かなものだな」

キャラ変わってるよな？絶対

あ、もう！ 補修行がなかつたらマジで落第なんだよ！」

「アーティストの才能を発揮するためには、アーティスト自身の才能が不可欠です。」

「一九二〇年

「手土の辯」太々一ぬるが

卷之三

卷之二

וְיַעֲשֵׂה יְהוָה כָּל־אֲשֶׁר־יְצִירָה  
וְיַעֲשֵׂה יְהוָה כָּל־אֲשֶׁר־יְצִירָה

「本當！？」

「ああ。うん。

「アツヒ顔を輝かせ、笑顔で返答する。

三十九 **おまかせ**で約ひ定め。

謎は登場するが透明感がある水

のシテニナノア。

寝起きはボサボサだった……

性格は口口口口変わるからよく分からん。

俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

補習授業が終わり、学校を出て、腕時計を覗く。

「6:20分。」

流石にどこかへ行こうとは言い出さないだろ？

学校の門をくぐり、近くの信号まで来ると、『ミナト』は眼を見張つた。

「……ミナト？ ミナト……？」

信号の反対側でミナトが腹から血を出して倒れていた。周りの通行人（野次馬）がとやかく言っているが、人ごみを搔き分け、ミナトの元に辿り着いた。

「あれ……？ 『ミン』？」

「おまつ！ 何してんだ？」

「心配……してくれてるの？」

「当たり前だろー！」

「えへへ……つと……」

普通に立ち上がるときに出した。

「お前大丈夫なのか？」

「平気だよ。これくらいなら。」

銃で撃たれたような傷痕が5～6カ所あるのに……無事？

んなやけあるかあ！

「おい！ 病院に行かなくてもいいのか？」

「うーん……病院じゃ、傷、治らないし。」

もう今日は帰るね

「……」

じゃつと行って走つて帰つたミナト。なんだつたんだろ？

家に着いたのが8：40。遅くなつた……  
なんだか家に帰りたくないで遠回りしてきた。  
絶対無事じゃないよな。あれ。

「あ～ 気になる」

誰にも届かない心配を放つてみる。  
その時家のチャイムが鳴つた。

「……」

なんだか出たくないな……出なかつたら物語進まないし、仕方ない  
か。

「はーい」

「んばんわ」

「……ミナト？」

どうせこんな展開かと思つてたけどな。

「私はミナトではない。」

「だつて！見た目とか同じじゃん！」

「私はQ-P-O-10号。固有名ナギサ」

「はあ……」

納得した振りをしておく。

「今日一日泊めてくれ」

「はいはい」

なにこいつ……口調が違うからいいけどね。密姿同じじゃん！

「んで？今日帰るとか言つてなかつた？」

「それはミナト。」

「そういう問題かよ」

「私もあなたと話してみたかった」

「なんで昨日ミナトが泊まつたのしつてんの？」

「Q-P-O系統は研究所と思考がリンクしている。」

それはQ

の全体で共有できる

「そつか」

「で? 何から話せばいい?」

「何から、というと?」

「お前は俺と話したくてここに来たんだろ?」  
「分かりました。一つ相談したくてきました。」

「内容は?」

「私たちQ

を守つてください。」

「私たち?」

「何人いるの?」

「あ……ノつてしまつた。」

「全部で100体います。」

ある組織で作られ、世に放たれたのですが、  
脳リンクが出来ることから2体以上捕まえて兵器として  
使おうとする組織が後を立ちません。

なので、私たちをその組織から守つてください。」

「なんで俺なんだ?」

「あなたは世界で一番強い「力」を使いこなせるからです」  
「……最弱の「テレキネシス」も使えないのに?」

「はい。」

「それじゃあ 使わせてみてくれよ」

「分かりました」

「そう言って俺の腕をつかんだ。」

次の瞬間、視界が一転した

12月25日 ＜深夜＞

「「」は？」

「研究所です

PSI能力開発をしています。」

「ふーん」

至る所で機械が「ウイイン」と唸りをあげている。

「「」です」

「うわっ すげえ」

相当な数のミナトやナギサがいた。

「全て固有名が在ります。覚えますか？」

「遠慮しておくよ」

「やあ こんにちわ」

「あつ こんにちわ」

研究所の博士みたいな人が握手を求めてきたので握手をした。

今つてこんばんわだよな？」

「君が例の「ミゾン君かい？」

「え？あ！はい」

「それじゃ、こっちに来てくれ」

「はい」

機会がいっそう多い部屋に来た。

「これをつけてくれ」

「なんですか、これ？」

「脳波を一定間隔で狂わす機械だ

君にはセンスはあるのに気力がないと聞いた。

今は役目が出来る。それを強く思い浮かべて

護衛は決定なんだ……

「了解です」

あいつ等を守る……あいつ等を守る……あいつ等……を

「グウ」

「よし」

俺は寝てしまつたようだ

「「」「は？」

「あーおきたあ 今日は補修ないんだよね？」

「うん。」

「私はミナトだよ！」

「」「いつ、初めて会つた朝は性格怖かつたけど……キャラチエンジ？」

「そつか」

「私が能力発動まで指南することになつてるから」

「オッケー」

「それじゃ、まずはねえ……」「飯作つて！」

「……は？」

そこにはキッチンと冷蔵庫がある。

「私、ご飯作れなくて……」

「はいはい」

俺も腹減つたしな。

「私も食べる」

「あ！ ナギサはだめ！」

「いいよいよ」

「えーっ」

「ありがとつ

つていうかナギサ影薄いなあ 気付かなかつた。

（1時間後）

炊飯器がなかつたからナベでご飯を炊いている。  
神経がいる作業だ

～2時間後～

これで7回目の失敗だ

～3時間後～

米なくなってきたな

～4時間後～

もう何回目だろ？

「お腹減ったよ」

「同じく

「俺もだ」

「なんで炊けないの！？」

「んじゃお前がしろよ！？」

「……」

「今日はおかげこじよづか……」

「うん……」

「分かりました」

年上口リコン顔に囲まれて、飯を食べた。

これから、どんなことをするんだ？

12月26日 ＶAM＞

「無理無理、吐く！」

「逃げるなあ 特訓だああ」

フツ！つと田の前にナギサが現れる  
ガシツ！つと腰を掴まれ身動きが取れなくなる

「しまつた！」

「ナイスナギサ！ <炎よ><sup>バイル</sup>」

「ちょ！ ま！あああああ」

「アア つと炎に包まれて焼け死ぬ感覚を感じた。皮膚あちい！」

「殺すきか！？」

「<引力><sup>アトラクション</sup>覚える氣あるの？」

「それを言つなら <反発力><sup>レブリション</sup>よ」

「どつちでもいいのよ！ ああ 使いなさい」

「んな無茶な！」

「あんたなら出さる！ ああ！ <炎よ><sup>バイル</sup>」

「くそ！ <反発力><sup>レブリション</sup>！ ぐあああああああ」

失敗。そろそろ死ねるんじゃないかな？

「こんの役立たず！」

「うつせえ なんのヒントも貰つてねえぞ！」

「それなら、先ず、炎を追い払うイメージと、QAOを守るところ  
感覚を持つて」

「え？ ああ 頑張る」

「ナギサあ 面白くないじやん」

「今までは効率が悪い」

「知らないよそんなの」

Sめ

「さー <炎よ><sup>バイル</sup>」

イメージ.....イメージ.....イメージ.....きたー！

「<反発<sup>レアリシヨン</sup>力>！…」

炎が方向を変え、ミナトに向かう、それをミナトはパイロキネシスを止めて回避

「やつと出来たわね」

「グア！？ グアア」

脳が焼ける…

「ぐあああああああ…」

焼けるような痛み…なんだこれ…

「能力の反動ね。 博士呼んできて」

「了解」

フツ ツとナギサが消え、次の瞬間、博士を連れてその場に現れた。

「やはりこうなつたか。 <治療<sup>アコニング</sup>>」

ポアアアアつという感覚が頭を撫でる。

徐々に頭の熱が冷えていく感じで痛みは去つた。

「なんども力を使えば慣れると思うから、頑張つてみて  
「あ……はい」

以前に「特殊な能力者は10名いる」と言つたが厳密には間違いである

地球の人口を約6億人と考えて1/4、実に2億人の能力者が居る。日本には2300万人だけか?

そして、能力レベルというのが存在する。

・レベル1 <物体移動・テレキネシス>

・レベル2 <炎・パイロキネシス> <電気・エレキネシス> <液体・

アクアキネシス>

<遠距離会話・テレパシー>

・レベル3 <治癒・ヘアリング> <衝撃・ブレイク> <瞬間移動・テレポート>

・レベル4 <予知・プレゴニクション> <千里眼・クレヤボアンス>

<精神読み取り・サイコメントリー>

・レベル5 <重力・グラヴィテーション>

・レベル6 <反発力・レプリジョン> <引力・アトラテーション>

その他

他にもいろいろあるのだが、大部分はこれだ。

そして、レベル5、6を使える人物が合わせて十名。

いろいろな重大機関に勤めているやつらがほとんどだがこの十名が世界のいろいろな基準を決めている。

・能力申請してない能力者が居た場合取り押さえ、罰則  
・レベル4の一部とレベル5以上の者は年に一度必ず集会に集まる

・未成年が能力を使う場合、申請が必要である

他にも100も200もあるが、一部だけを提示して見た  
俺は17歳だから……申請は？

「大丈夫、出ているわよ」

「！？ ミナト？ナギサ？」

容姿はQPOの女の子が立つていた。

「私はQPO35号、能力はく精神読み取りサイコメントリード」

少し読みませでもらつたわよ」

「……んで？ なんで出ているの？」

「博士が今日中には出来るだらうって、昨日から3日間の能力使用  
申請が出ているわよ」

「そりゃありがたいことで」

用意周到なんだな、」この博士

「QPOっていろんな能力使える人居るんだな」

今は休憩時間で研究所の外のベンチで缶コーヒーを飲み中。

あんまり美味しくないな……

「そうよ。く物体移動テレキネシス」からレベル4の大部分まで。

美味しくないなら頂くわよ」

ひょいと缶コーヒーを取られ、飲まれた。

こいつ、大人びてるんだな。

ここで研究が19年行われてるって事かな？

なんでこいつ等は19歳なんだろう？

「信じたの？それ」

飲み終えた缶コーヒーをく物体移動テレキネシスでゴミ箱まで運ぶ

……名前聞いてないな。

「ああ 少しな。」

「1号から順に年齢は若くなっている。私は18歳」

それでも年上……

「100号は8歳よ

「ふうん」

「なんで一つの能力使えるの？」

「常人にはきついと思うんだが。

「常人じやないからよ。

私たちが生まれた理由は『複数能力者』サイ・プレーヤーの育成。

私たちの脳リンクを普通の人につないで100種類使える人体兵器を作るのがここのお研究所の顔。

博士はいい人なんだけど……利用されてるつぽいの」

「つてことは、お前の能力は別のQPOも使えるつて事？」

「いや、今は〈開放モード〉ではないから。」

「んじや、なんで使えるんだ？」

「常人じやないからよ……レベル1は全員使える

〈物体移動〉つて最弱つて言われてるけど

本当は使い勝手のいい能力なのよ」

「ふうん」

「こいつでもないのか……

「なにが？」

「いちいち全部読み取るなよ」

「癖で……ま、私の役目は終わつたから早く入つてきなさいよ。

博士、呼んでるわよ」

「……早く言えよ。」

俺は立ち上がつた。結構寒くなつたな、ここ

「なんすか？ 博士」

「うむ。君の能力をPP（PSI Point）の制限なし使えるようにしたいと思う。」

「この機械を頭につけてくれ」

「頭が痛くなつたのは……」

「PP許容値を超えてしまつたからだ。」

PPはPSIを使うことで自然に増えていくのだが  
君は常人の数千倍つて所か。」

「どんだけだよ」

「PPというのはサイポイントとか言つておるが本来は脳の容量を意味するんだ」

PSIを使うことで脳は酷使されていく。

そして酷使の要領がオーバーしてしまつと、君みたいに頭が痛くなつたり、

視界が悪くなつたり。

やりすぎると死んでしまつたり、体が動かなくなる」

「へー これからする、その機械は何を俺の脳に『与えるんです？』

いやな予感がするんだよな

「脳に無理矢理能力をフル活用させる」

「は？」

「スポ！ つと頭に機械をはめさせられる

「大丈夫だ 治癒能力を使つてあげるから」

「ウイイインと機械が鳴る。」

脳に無理矢理干渉させられていぐ。

「ぐああああああああああああああああ

俺は氣絶してしまつた

「はあはあ」

私は現場へ急行してきた。

私の追つてはさつき潰した。長い戦いだつたQPO思考リンクでいろいろ入つてきただがこつちから向こいつに流すのはNGだ。

現場は酷い有り様だつた。

とんでもない重力で地球をへこませたような感じだ。地球上で何箇所もこの原因不明の超巨大クレーターが出没している。誰の仕業だらう?

これは……レベル7の問題になつてくるわね……

「はあはあ」

俺は手足を拘束されたまま脳が吹き飛ぶ感覚に耐えた。気絶から意識を覚醒させると思考は難しいほどだつた。何を見ても感じないし首も動かない。

体感時間で5時間くらいしてなんとか動くようになつたらそこは酷い有り様だつた。

研究所はぐしゃぐしゃになおり、俺が居るところ以外は陥没してい

た。

「博士！？」博士！！」

「ここまで能力が強いとは思わなかつたよま、研究所は粉碎だが、QPOは全員無事。私も何とか生き残つたよ」

「俺……が暴走しちまつたつて事ですか？」

「この機械が強制的にそつなるようにしたんだ」

「そう……ですか？」

「博士！大丈夫？」  
「アーリング  
<治癒>のQPO連れてきたけど……」

「大丈夫だ、ナギサ、メルー。」

ナギサは「瞬間移動」で決まりかな

「そろそろこの拘束具、はずしてもらえませんか？」

「このミニゾンは気付いていなかつた。

ミニゾンが地球に及ぼした大災害に……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8596z/>

---

去った日常

2011年12月29日21時33分発行